

【短報】ウスグロチビツツハムシの山梨県韮崎市における記録

ウスグロチビツツハムシ *Cryptocephalus fulvus* Goeze, 1777 は、生態・分布情報の少ない種で、栃木県では準絶滅危惧に指定され、カワラヨモギの自生する鬼怒川河川敷に生息することが知られている(栃木県林務部自然環境課 2005)。また本種は、甲虫相調査の先進県である神奈川県における記録も1例と少なく(平野 2004)、最近刊行された山梨県韮崎市鳳凰山とその周辺における甲虫目録(水野・細田 2010)でも記録されていない。筆者は韮崎市の釜無川河川敷でこれを採集しているので記録しておく。

1♂, 1♀, 山梨県 韮崎市釜無川武田橋付近, 19. VIII. 2005. 籾倉正人採集。

河川敷の中州に渡って、カワラヨモギ群落を徹底的にスイープすることにより採集した。同時にカワラヨモギに依存するといわれるヨツボシアカツツハムシ *Coptocephala orientalis* Baly, 1873 を1♂1♀採集しているが、ヨツボシアカツツハムシは当地では昔から個体数が多い。これら2種の山梨県の生息状況は、栃木県の鬼怒川におけるそれと類似している。ウスグロチビツツハムシは微小で生息環境が特殊なため、採集例が少ないと考えられ、各地の丸石河原のカワラヨモギを盛夏に調査することにより、生息地が発見される可能性が高い。



図1. ウスグロチビツツハムシ。

引用文献

- 栃木県林務部自然環境課, 2005. レッドデータブックとちぎ — 栃木県の保護上注目すべき地形・地質・野生動植物 一, 898 pp.
- 水野弘造・細田倅, 2010. 地域甲虫自然史第6号 韮崎市(山梨県)の甲虫, 205 pp., 8pls. 日本甲虫学会, 大阪.
- 平野幸彦, 2004. コウチュウ目. 神奈川県昆虫誌 II, 神奈川県昆虫談話会, 小田原: 335-835.

(〒 215-0021 川崎市麻生区上麻生 6-1-26 柿生グリーンハイツ 101 籾倉正人)

【短報】交尾器などのユーパラル封入の際に便利な道具

ハネカクシなどの甲虫の雄交尾器や貯精嚢を虫体から摘出して、水酸化カリウム処理・洗浄・脱水の後、ユーパラル(euparal)で封入する手法については直海(1999)が解説している。また、それらをマイクロカバークラス上に封入し、標本本体と同一の針に刺して保存できるようにするというアイデアも公表されている(Maruyama 2004)。ここでは、筆者のユーパラル封入標本作成の経験から、封入作業の際の道具として使える茶笥の穂とガラスペンを紹介したい。

茶笥の穂: 雄交尾器や貯精嚢を針先に付けたユーパラルで、無水アルコール中からピックアップする場合は問題ないが、それらを水酸化カリウム水溶液や蒸留水中から引き上げるため、先端を曲げた針などに引っ掛けようとしても金属に反発するように動き回り、神経を使うことが多かった。たまたま戸棚を整理していたら、妻が若い頃使った茶笥が出てきてハッと閃いた。茶笥とは茶道で使う竹製の小型の泡立器である。早速ネットで探したところ、茶笥には80本立てとか100本立てとかがあり、材料の竹の太さにより穂の数が決まるらしいが、外周に先方を湾曲させた穂が半数並び、中心にも半数が束ねられている。迷うことなく100本立てを購入(800~1,000円程度)して、穂の1本を切り取り使っているが、かなり具合がよい。それに残りが多数あるので、私の場合もう補充する必要はない。常用するようになると、次第に穂先がパーツの掬いとりに適したよい具合になってくる。

ガラスペン: ユーパラルに雄交尾器や貯精嚢などを封入する際、それらの位置の固定、気泡の除去は重要である。それらの内部に気泡がある場合は、再度封入するしかないが、針先で対象物の角度を若干調整したり、ユーパラル中の気泡を除去したりすることは可能である。その場合、封入から多少時間を置いた方が作業効率がよい。しかし、それらの作業によってユーパラル中や表面が乱れたり皺ができていたりして、検鏡に支障をきたす状態になる。その際、乱れた部分に微量の無水アルコールを垂らしてその部分のみユーパラルを流動化し、硬化した時によく透過するようにしたいのだが、最近、注射器は一般には入手しづらいし、ごく微量の必要量を注射器で射出できるかどうかは自信がない。スポイトでは量が出すぎることが多かった。容量可変ピペットなどもあるが高価である。

そのような中で、ガラスペンの存在を知った（2,000円程度）。これは、先尖形のガラス棒の先端部に向けて螺旋状に刻まれている複数の細溝からインクが紙に移ることで文字などが描かれるという筆記用具で、意外に人気があるらしい。無水アルコールをつけたガラスペン先端を乱れた部分に接触させることで、ごく微量がユーパラル上に移動するので目的を達することができる。

引用文献

直海俊一郎, 1999. ユーパラルを用いたハネカクシ類の交尾器等の封入と観察. ハネカクシ談話会ニュース, (8), 2-7.

Maruyama, M., 2004. A permanent slide under a specimen. *Elytra*, Tokyo, 32, 276.

(〒243-0402 海老名市柏ヶ谷1112-16
西川正明)



益本仁雄博士退職記念論文集

「MASUMUSHI (益虫)」

Special Publication of the Japanese Society of Scarabaeoidology, Tokyo

2011年4月25日 コガネムシ研究会発行

発起人：秋田勝己・安藤清志・宇都宮由佳・越智輝雄・川井信矢・藤岡昌介・森田誠司
(五十音順)

B5判, 上製本, 345頁フルカラー

価格： 6,400円(税込・送料300円)

注文先・問い合わせ： 昆虫文献 六本脚

平成23年3月31日、コガネムシやゴミムシダマシの研究で知られる益本仁雄博士が、めでたく定年を迎えられ、大妻女子大学を退職された。この度、益本博士が顧問をつとめられるコガネムシ研究会から、退職記念論文集が出版されたのでご紹介する。

序文と略歴に続き、益本博士の1955年～2010年の336編の著作、並びに博士が記載された900を超えるコガネムシ上科とゴミムシダマシ上科の新タクサを掲載した。本書ではこれらの単なるリストではなく、種名や文献を検索しやすいよう配慮し掲載しており、コガネムシやゴミムシダマシの研究を志す方には必携の文献である。

さらに、今日の第一線で活躍されているベテラン・新進気鋭の世界各国の研究者による寄稿報文47編が収録されており、その内訳は記載論文32

編、一般報文3編、祝辞12編となっている。コガネムシ上科に限らず、広く甲虫に関するもので、分野別にみるとゴミムシ、チビシテムシ、ハネカクシ、アリヅカムシ、クワガタムシ、クロツヤムシ、コガネムシ、タمامシ、コメツキムシ、ジョウカイボン、ベニボタル、ホソカタムシ、ハナノミ、ゴミムシダマシ、カミキリムシ、ゾウムシと多岐にわたっている。

そして本書の特徴でもある、博士の著作に使用された細密画のギャラリーは、昆虫画を描かせたら右に出る者がいないといわれるほどの達人、故遠藤俊次氏や井村有希氏の力作、また昆虫写真は木内信氏が腕をふるわれた精巧なもので、オリジナルを可能な限り美しく再現した一見の価値がある作品集である。

その他、海外の博物館やフィールドで博士が交流した人物との思い出の写真、博士が携わった半世紀前から最近に至る時期までの昆虫雑誌や図鑑などの書籍のカバー写真も収録されている。

本書は、論文集であるばかりでなく、図録でもあり、読んでよし、眺めてよし、参考にしてよしという、今までとは異なったユニークな記念出版物となっている。

(コガネムシ研究会 川井信矢)

